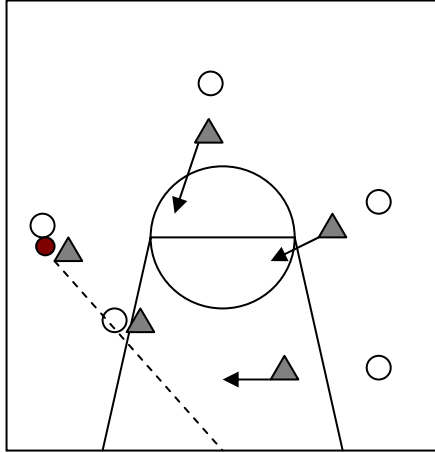


ペリメータとインサイド

アメリカではオフェンスで「ルックインサイド」という言葉があるそうです。NBAのゲームを観ていてもペイントエリア内のセンター同士の1対1は迫力満点です。バスケットボールのオフェンスは、複数のディフェンスがいても確実にボールを運んでくれるガードと複数のディフェンスがいても確実に得点できるセンターがいれば簡単に得点を取ることができます。強力なガードとセンターがいればフォワードの役割はセンターへパスを繋ぐか速攻時に仕掛ける程度です。しかし、センターやガードを中心にゲームを行なった場合、相手チームに自チームを上回るセンターやガードを有していたら勝つことは難しくなります。エースプレイヤーのドリブル1対1に頼った場合も同様です。ディフェンスはエース選手の1対1に対するヘルプを優先させれば得点を抑えることができます。それでもオフェンスの選手がディフェンスに対して圧倒的な能力差があれば問題ありません。能力のある選手を毎年リクルートできれば良いのですが、多くのチームはその年によって選手の能力に差があります。チームの指導者は能力に頼らないオフェンス、ディフェンスを準備し指導できれば安定して良い戦績が残せます。今回は、フロアバランスとスペースの考え方としてペリメータの選手とインサイドの選手の位置取りについて私が学んできたことを紹介します。言葉足らずや意味不明の点が多々あると思います。また、これがベストとはいえません。各チームで工夫してください。

状況1

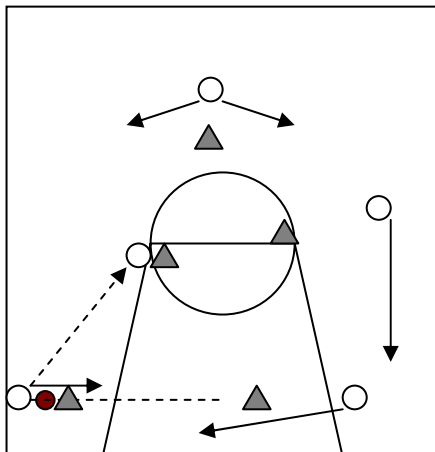
インサイドの選手がボールを保持しているペリメータの選手のインラインにいる場合



- ・ペリメータの選手はインサイド選手へパスする際、ボールマンディフェンスを抜いたパスをしなければならない。(ディフェンスの上、肩口、足元、サイドスピンプス、ラテラルパス、フェイクパスなど)
- ・ペリメータのボールマンディフェンスはペリメータの選手がインサイドのパスを狙っていることを読めばインライン上をヘジテーションすることで中、外ともに守ることができる。
- ・ペリメータがドリブル1対1を仕掛けた場合、インラインに対して迂回しなければならないため、攻めるスピードが遅れ、ヘルプが間に合い易くなる。
- ・インサイドの選手にパスがとおれば、左右どちらへも攻めることができる。
- ・ヘルプサイドの選手が飛び込むスペースは確保し辛い。

状況3

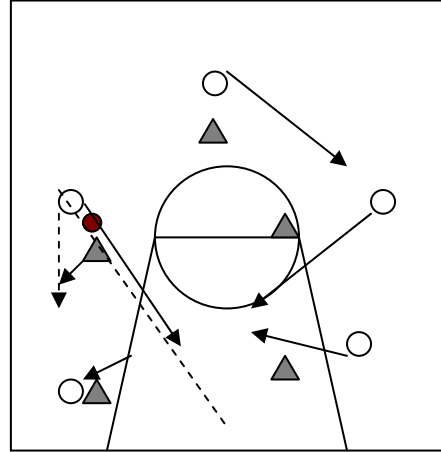
インサイドの選手がボールを保持しているペリメータの選手のインラインを外した場合2



- ・ペリメータの選手がコーナーでボールを保持した場合、ボールサイドのインサイドの選手はエルボに位置することで、ボールマンのインラインを外すことができる。
- ・ペリメータのボールマンディフェンスがインサイドの選手へのパスモーションに反応すればインラインに沿って縦に突破するチャンスができる。
- ・ペリメータからインサイドへのパスが容易になる分、ペリメータとインサイドのコンビネーションプレーが容易になる。この位置からはパスした選手とトップにいるガードとのシザーズプレーができる。また、インサイドとトップの選手とのスクリーンプレーも可能である。
- ・ヘルプサイドのセンターがスペースに飛び込むことで更に空いたスペースへ飛び込みフリーになるチャンスを作れる。

状況2

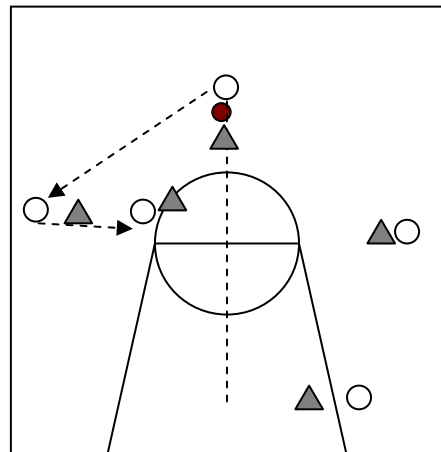
インサイドの選手がボールを保持しているペリメータの選手のインラインを外した場合



- ・ペリメータの選手はインサイドの選手へパスする際にボールマンディフェンスを抜く必要は無い。
- ・ペリメータからインサイドへのパスが容易になる分、ペリメータとインサイドの2対2コンビネーションプレーが容易になる。
- ・ペリメータのボールマンディフェンスがインサイドの選手へのパスモーションに反応すればインラインに沿って縦に突破するチャンスができる。
- ・ディフェンスの状況によるが、ヘルプサイドの選手がペイントエリアに飛び込んでチャンスを作ることが出来る。

状況4

インサイドの選手がボールを保持しているペリメータの選手のインラインを外した場合3



- ・トップにボールがある場合もインサイドの選手はボールマンのインラインを外します。
- ・インサイドのディフェンスがオーバーガーディングしていれば、ウイングへパスしてパスのアングルを変えれば、インサイドの選手にパスが通せます。(直角ポスト)